



# ATOMIC GREEN

Atomic = 原子、これ以上分解できないもの

Green = 草木、大地（自然）の色

このふたつは地球上に存在するすべてのものの基本。

人間のもとになっている根本的なことを忘れずに  
シンプルなものづくりをしたいという想いを込めて、

二〇〇六年夏、シューズブランドAtomic Greenはスタートした。



目線がたった1センチ高くなるだけで、世界が色めきだす。  
ありふれた日常の景色がアップデートされる。笑顔になる。  
ある日私は、その靴で魔法にかけられた。

巻頭特集

## 美しさも寂しさも 包み込む

女性らしさのリアリティを求めて

恵比寿・モデル/デザイナー sachi

写真・細居孝次郎 文・加藤亜玲  
photograph by Kojiro Hosoi text by Arei Kato



## Sachi

さち

1979年生まれ。大学在学中に新人ながら山本耀司氏の目にとりモデルとしてパリのコレクションに初参加。その後、HERMES、GIVENCHY、Alexander, McQueen、Viktor&Rolfなど世界のビッグメゾンで活躍中。東京コレクションでは、DRESSCAMP、MIHARA YASUHIRO、THEATRE PRODUCTSなどに参加。コレクション以外にもTV CM、MUSIC PV、映画、舞台など幅広い才能の持ち主。2005年10月、Atomic GreenのShoes Designerとしてデビュー。



## 活かしあうふたつの顔

モデルをはじめ女優など多方面で活躍しながら、Atomic Greenのデザイナーを務めるSachi。北京でのショーを終え、帰国したばかりのころをインタビューした。

華々しいショーのトップヒラストでランウェイを飾るほど、世界の注目を浴びるモデルとしての顔と、靴の生まれる出発点であるデザイナーというふたつの顔をあわせ持っている。

「最初の頃は大変でしたけど、今は、もしモデルだけ、デザイナーだけになったらだめな気がする。ふたつやってこそ、初めていい仕事ができるんで

す。両方の経験をうまく活かせているというか」

初夏の光を横顔に受け、少し目を細める。ショーの中で見せたクールな表情とは異なり、ほんわりと柔らかいながらも、スツと澄みきった透明感が彼女を覆っている。

両方の仕事が入り混じり、刺激となつてよりよいものが表現できる。そんなサイクルを三年間続けていくうちに自信と迷いのなさができあがった。「やっぱり靴の仕事をしてい

るときはモデルの経験が活かしているし、モデルの仕事をしているときは靴の経験が活かしている。たとえば、洋服のデザイナーさんとも作りの話もできるようになりました」

## デザイナーになるまで

本格的にデザイナーとして活動を始めたきっかけは、私生活でもパートナーであり、Atomic Greenの経営しているアトリエレテの代表取締役社長夏井雅人の独立だった。

夏井の勤務していた会社が靴を扱う業種だったこともあり、Sachiも社外の人や工場の人と会い、靴作りの裏側を見る機会に恵まれた。だんだんと靴づくりに興味を持ち始め、モデル以外にも何か新しいことがしたいと思った時期と、夏井が独立しようとしたタイミングが一致した。

「昔から靴は好きだし、ものづくりも好きだったけれど、

もしモデルだけ、デザイナーだけになったらだめな気がする。ふたつやってこそ、両方の経験をうまく活かせているんです。



ひとたびカメラの前に立てば一瞬にして「モデル」の顔になるSachi。今回の取材では、リラックスした表情でインタビューに答えてくれた。「こんなことをするのも好きですよ」と靴を手にしたはずらっぽく笑う。

学んできたとかはまったくなくて。だから、モデルの経験も活かして彼のために何ができるかなって考えた結果、『デザイナーをやります』と言ったんです」

こうしてAtomic Greenのデザイナーという肩書きが新たに加わったのだった。デザイナーとしてのSachiは今年で三年目。モデルのキャリアは長いものの、ブランドの設立当初はほとんど初心者。何もわからない手探りの状態から、約半年足らずで一七、八型ある最初のコレクションを発表した。

「やっぱりモデルとして見てきたいろいろなものや、体験してきたことが私の一番の武器でした。でもほんとうにきれいな形は工場の人の方が絶対によく知っている。だから、ビジュアル面は私が提供して、作りに関しては『お願いします』って、同時進行で学ばせてもらっているんです」

モデルの活動を通して、一流の靴や洋服をたくさん身に着け、自らが表現をし、デザイナーをはじめ多くのファッション業界の人とも関わってきたこと、そしてそこで磨か

流行であったり、独りよがりなまったく次元の違うものなのではない。Sachiという一人の女性のフィルターを通してこそ見つけられた、私たちが見過ごしてしまった日常のかけらなのかもしれない。ひとたびその魅力に気づくとすっかりきってしまう。

「わたしの場合、何かを見てもまずイメージから入っていくんです。たとえば、北京のシヨード、会場だった紫禁城の故宮を見たときは、この建物がどれだけ歴史があるのかということよりも、鮮やかな赤とブルーの組み合わせが目がいて。難しいんですけど、たぶん物体としてものを見るのではなく、イメージとして色彩として見ちゃうんですよ」

特に色の組み合わせに興味があるという。そこには難しい理屈は存在しない。あるのはただ純粹に、美しいと感じられる感性のみ。Sachiが「武器」と表現した数多くの経験が、アイディアソースとなっている。

愛すべき子どもたち

Atomic Greenの靴は

デザインのアイデアは、ほんとうに日常のことから浮かんでくる。印象に残った色彩や形、そのときの気持ちも材料に。



06 Summer  
**Alter ego**  
もう一人の自分



07 Spring & Summer  
**TweetTweet**



07 Summer  
**Wandering In Forest**  
さすらいの森



07/08 Winter  
**LA MER AU FOND DE L'AME**  
心の中の海



08 Spring & Summer  
**CITY WOMAN VIEW**  
都会に住む女の見た風景



08 Summer  
**CITY WOMAN VIEW**  
都会に住む女の見た風景

れたオリジナルの感性は、Atomic Greenの根底にありながらも最大の魅力として花開いている。

### デザインの源

シンブルな中に「今」の気分がほどよく加わったデザインに女ごころがくすぐられるAtomic Greenの靴たち。アイデアは具体的にどんなふうに見えるのだろうか。「ほんとうに日常のことから浮かんでくるんです。そうです、たとえばどこかに行つたときはいつもより印象に残るものが多いから、その色彩だったり、形だったり、そのときの気持ちなんかも材料になります」

デザインをおこすとき以外、他のブランドの靴を参考にすることはあまりない。

「元となるのはあんまり形のないんですね。人がきれいだと思わないものをきれいだと思ったり、自分だけが好きなものをみつけたりすることは多いかもしれない」

コレクションの中には一見見慣れない斬新な色の組み合わせや、ヒールの形のものもある。しかし、それはただの

足一足すべてに名前がつけられている。外国の女性やお茶の名前から、『一本の煙草』という日常のワンシーンまで、それぞれのコレクションによつてさまざまだ。

「名前をつけるのは子どもに命名するのと同じ感覚。けつしてイメージを押しつけるつもりはなくて、せつかくこの世に産まれてきたのに名前がなくっちゃかわいそうだなって。名前をつけるのはタダですしね」

と言つてほほえむ。「洋服と違って靴はずっと履けるものじゃないですか。私も気に入った靴は何年も履いてしまうんです。古いものほどその人のもことになるんですよ」



靴の箱というと白地にロゴが印刷されているだけの素っ気ないデザインが多いが、Atomic Greenの箱はレースやリボンなどのコラージュをプリントしたもの。Sachiの「宝箱にしてほしい」という言葉から生まれた。



自分でデザインした靴を「こども」というだけあって、本当に愛くるしい瞳でAtomic Greenの靴を見つめるSachi。名前という翼を与えられた「こどもたち」の上には、それぞれ異なるストーリーが積み重ねられていく。ちょうど革製の靴が、長く履くことでだんだんとその人の足の形に馴染んでいくように。

### 想いをかたちに

年に四回発表するコレクションには、当初からテーマを表した短い文章がつけられている。国も時代も特定できないような、どことなく神秘的な物語から、働く女性の一日の情景まで、毎回バリエーション豊かだ。

「具体的にしようとして広がっていかない。ちょっと抽象的なほうがアイデアを自由に発想できるんです」

それは靴を履く側にとっても同じことで、はっきりとしたイメージが浮かんでくるのではなく、想像の余地が残されていることで、靴に対して自由に思いを巡らす楽しみがある。物語は毎回あるひとつの曲から生まれてくるという。

ジャンルはクラシックからポサノバまでさまざまだ。そのときの気分やテンションに合う曲を見つけ、何度も何度もくりかえし聴くことでイメージを深めていき、具体的なコレクションの世界を作り上げていく。

「一曲からどんなふうらませていって、その音楽に合う一枚の写真だったり絵だったりを見つけていくんです。さらに聴きながらテーマを書いて、絵を描いていきます」

二〇〇八/二〇〇九秋冬コレクション『A valley of phantom in your dream』  
幻の渓谷は貴女の夢の中に  
は、オリバー・ワソウの絵を見て、そこに描かれた泉の緑とも青とも表現しがたい色にインスパイアをされた。さらにイメージを広げた音楽は映画のサントラというだけあって、おとぎ話のワンフレーズのような幻想的な世界が表現されている。

そっと地上を覗き込むと濃霧がかかった山奥に幻の渓谷は存在する  
群青の滝は降り注ぎ  
滝壺から溢れ出す  
水しぶきは

動物に安らぎをあたえ

青い草花に

彩を添える

幻の渓谷はひっそりと佇む

そして

空がゆつくりと

深紅の帽子をかぶると

渓谷は大きなあくび

滝の水は静かにあがり

霧の布団に

潜り込む

また暁の空に出会う時まで

深い眠りにつく

二十弱あるこのコレクションの中でも一番自分が気持ち



「これは泉からあふれ出す水しぶきを表現しているんです」一足の中に、森の中で太陽が昇って沈み、月が出る様子を表現した「物語の幕開け」。シンプルながらも美しい形と凝ったデザインを可能にしているのは、たっさんの分野のプロが関わっているからこそ。他にネイビーとグレーがある。どれも絶妙な色味で、Sachiのセンスが活かされている。





Atomic Greenの靴箱やブランドのロゴを手がける西館朋央氏のカラー  
ジュ作品。本物の木を使い、展示会場を「幻の溪谷」に見立てた。

よく描けたという「物語の幕  
開け」。

「ここをこうして、こっちは  
こういうふうにして、と一生  
懸命考えたんではないんです。  
ここにこんな木があって、こ  
こに月があって、太陽があつ  
て、というイメージがするす  
る浮かんできて。だから、実  
際出来上がりがどうなるかは  
わかりませんでした」

エナメルにスタッズやラメ  
などの異なる素材をのせるこ  
とで、森の一日の流れが描き  
出されているストーリー性の  
あるデザイン。

「この『月』に使っている素  
材を表面の皮を縫い付ける  
のはすごく大変らしいんです。  
一度接着してから縫うみたい  
で。だからほんとは『雲』  
とは重なっていなかったんで  
すが、『月』に『雲』が少し  
かかっているように変更する  
ことになりました。でもこれ  
はこれですてきだなんて」

できあがるまでの過程を楽  
しむというスタンスにゆった  
りとした時間の流れを感じる。

一緒に一足を  
作り上げていく感覚

生み出されたアイデアを

関わっている人たちみんなが気持ちよく仕事ができないと。  
そうするとね、自然といい靴ができあがってくるんです。



2008年4月の展示会は、明治時代に建てられた洋館「ターミナルラウンジ」にて。「新しさ」と「遊び心」を感じさ  
せる招待状にも毎回こだわりがある。今回は苔を敷いた箱に、Sachiの横顔と鳥の切り紙、ビー玉を入れた、会  
場の雰囲気を感じさせる立体的なDM。

実際に形にしていくのは、独  
立前からのおつきあいだとい  
う工場の仕事。足繁く通い、  
職人と話をしながら、アイ  
ディアを形に落とし込んでい  
く。

「やっぱりそれまで関わって  
きたファッション業界の人と  
はちよつと違いますね。美し  
いものを作っているけれど  
職人気質だから、コミュニ  
ケーションをとれるようにな  
るまでには時間がかかりまし  
た。いまでも実はちよつと緊  
張しちゃう」

自分一人ではなく、作り手  
である職人さんをはじめ会社  
のスタッフまで、常に関わつ  
てくれる人たちと「一緒に作  
り上げている」という気持ち  
で靴づくりをしている。靴が  
できるまでの過程には想像以  
上に多くの人との関わりが必  
要だ。

ヒールやソール、皮も外側  
と内側では違うところから仕  
入れるし、ボタンナーや縫う  
人もそれぞれ異なる。こまか  
いひとつひとつのAtomicが  
絶妙に組み合わせられてはじ  
めて、Atomic Greenの靴が誕  
生するのだ。

「いくらこういうふうにした  
い、と思っても、現実的に無

理なこともある。それを強引  
にやってしまうのは好きじゃ  
ない。だから、自分はこま  
でつていう線を必ず引いてい  
るんです。ここからこっちは  
任せます、というふう」

あくまで工場のできる範囲  
でデザインをできる限り実現  
する手段を考えていく。

「こまではできますか？  
じゃあ、これができないん  
だったら、こっちをもつとこ  
うしてください」みたいなや  
りとりをして、バランスを考  
えながらやっています。やっ  
ぱりお互いが気持ちよく仕事  
できないと」

話に夢中になるとSachiの  
話し方はパキパキとしてくる  
そして、うれしくてたまらな  
いという表情を浮かべ、力強  
く言い切った。

「そうするとね、自然といい  
靴ができあがってくるんで  
す」

心が満たされる靴を

「この前知り合いの赤ちゃん  
に靴をプレゼントしたんです。  
さすがにAtomic Greenのも  
のはサイズがないから、違う  
お店ですけど。それで、そ  
の靴を履いて初めて外を歩い

たのを見たとき、人が地球と  
唯一つながつているものは靴  
なんだって気づいたんです。  
それですごくいいことじゃない  
かなあって」

靴の本来の機能は足を保護  
し、大地を踏みしめられるよ  
うにすること。けれど、デザ  
インを重視したためにその機  
能を無視した靴は多くある。  
女性であれば、一度は見た目  
の良さに惹かれて買ったはい  
いものの、痛くて履けなかつ  
た経験があるだろう。

「かわいいけど、履いて歩くと  
痛い、やっぱり痛い、ってい  
うのをモデルで何度も感じて  
きたんです。だからちゃんと  
かわいいって言われて、さら

に履きやすい靴を作りたい」  
目指していることはシンプ  
ルだが、まさに靴に対してわ  
たしたちが一番望んでいるこ  
とだ。

「まだまだ靴でやってみたい  
ことはたくさんあるんです。  
Atomic Greenの靴を作って、  
それを履いた人がよろこんで  
くれることがただうれしい。  
楽しいことが一番ですよ」

この先どんな物語がSachi  
のデザインから紡ぎ出されて  
いくのか目が離せない。きっ  
と、数多くの女性がAtomic  
Greenの美しさに魅了され、  
ひとたび足を通せばその魔法  
にかかれてしまうことだろ  
う。

ATOMIC GREEN

アトミックグリーン

株式会社アトリエ レテ

東京都渋谷区恵比寿西1-2-1

エビスマンション4-410

TEL : 03-5456-0752

HP : www.atomicgreen.jp

Sachi's BLOG : http://ameblo.jp/sussy191